

樂音

佛歴二五六五 西歴二〇二二

令和四年三月号

発行 樂音寺 住職 内藤睦雄

電話 090-3140-3931

FAX 0553-47-3495

寺庭 080-2065-7939



更地工事が終わり、設計士さんとのやり取りの段階となりました。何もない焼け跡はひたすら広く、一部黒い焼け跡の残る本堂がぽつんという境内です

三・四月の樂音寺

三月十八～二十四日 お彼岸

二十一日 彼岸お中日

二十六日十八時 オーケストラ演奏会

於YCC県民文化ホール

十三・二十七日 坐禅会 朝六時三十分

四月八日 お釈迦様の誕生日

十・二十四日 坐禅会 朝六時三十分

喫茶去

「きっさこ」と読みます。「去」という字があるので「茶でも飲んだらさっさと行けや」と感じる方もいるかもしれませんが、この

「去」は特に意味を待たない接尾詞。「よく来ていただきましたね。さあお茶でもどうぞ。」くらいの意味の禅語です。自分を訪ねてくださったことへの感謝の思いですが、さあ現実はどうでしょうか？

お釈迦さんの説いた四苦八苦の教えの中に「怨憎会苦（おんぞうえく）」という項目があります。好まざる人と会わなければならぬ苦しみ、とでも意識しましょうか。つまりお釈迦さんといえども世の中好きな人ばかりでないことを認めていらっしゃる。その上で、平常心で誰にでもお茶を出せるだろうかと思ったのですが、でもここで留飲を下げたはいけません。「嫌いな人」をそのまま「嫌いな人」に留めておくのではなく、その関係性を生んだ責任の半分は、いやきつと半分以

上は自分にある、自分の立ち位置を動かさなければ、自分が変わらなければ、という気付きを、お釈迦さんは期待しているのです。

どんな菓子があつたかなと気を巡らし、茶筒からおもむろに急須にお茶を入れ、茶碗を温め、おしゃべりをしながら程よく温度を抑えたお湯を注ぎ、茶たくに置いて・・・、という行為は「好きな人」には楽しいものです。

そこで「好まざる人」かもしれない方を目の前にして、自分の変わりようの第一歩が、あなたにとって、私にとっての『喫茶去』かもしれませぬ。



先月の掲示板

しんしんと

寒さが楽し 歩みゆく

星野立子

「しんしん」という

言葉は、雪が降ったり夜が更けたり、寒さがじわじわ迫ってくるような、ある

いは広くて誰もいない部屋

で一人ぼつねんとしてその寂しさが身に迫ってくるような、いずれにしても静まり返った寂とした様子が想像できる。漢字ではどう書くかなと探すなら、「深々」「森々」があるが「沈々」もある。しかしこれ以上考えるとパンダの名前につながってしまうからここまで。でも漢字を見るとさらに深い世界が広がるから不思議。

寒さが楽しい時ってあるものだ。若い時は



勿論だが、例えば病み上がって何ともないこ

との嬉しさ、プラス冷たい風に正面からぶつかれる小気味よさを感じることもある。それは寒ければ寒いほど良い。そんな時は歩みを止めて柵につかまりながら、人目も憚らず屈伸運動やアキレス腱を伸ばしてみたり。

いずれにしても生きている限り、過ごしてきた明るく楽しい人生の後押しをもらって歩くものだ。たとえ遠く歩き着く場所が死であつても。

臨濟寺専門道場へ出立

山梨に移って、楽音寺庫裡二階に落ち着いて約二週間で道場に行く準備をしました。まだ懇意にしている和尚さんもなく、襦袢を母に縫ってもらった以外の支度は衣屋のカタログに頼りました。かつて絵で見た修行僧の姿を自分に重ねてみるこの不思議



議さに加え、あまりにも今までの生活との違いに、その姿を遠くへ追いやったものです。正直途中で投げ出した形となった、音楽の仕事場への未練と後悔も日に日に募るばかりで、今考えると、ついてきてくれた家族の負担を、残念ながら思いやる気持ちは乏しかったと思います

ここへきて、そもそもどうして道場へ行く気になったか、なぜに樂音寺の父の跡を継ごうと思ったかを頭の中で整理し始めたのもこの頃です。当時自分の演奏や楽器のコンディション、さらにはフリーながら仕事の数や質も、悪くない状況でしたが、逆に今だなとも思いました。また都会の方が子供の教育にはいい環境にあるとは思いつつ、自然の中でのびのびとさせたいという願望も膨らんだものです。

いずれにしてもそうやって愚図愚図している間に時間ばかり経過し、お経も読めないしさっぱり道

場のことも、今のようにネットでサクサクというわけにもいかず何も分からないまま、ついに明日出かけるという日が来るのです。じつはその時になって初めて、女房が、私の道場生活よりも、彼女自身の山梨での、樂音寺でのこれからの生活への不安を訴えてきたのです。それは至極当たり前のことでした。

編集後記

時間がかかりましたが、やっと以前の生活を思い出してきました。この「樂音」もその一つですし、境内を歩いても今までにない思い付きもあります。犠牲は大きかったです。リセットと捉えようと、こんなにごいチャンスはめつたにありません。

と同時に僧侶としての原点として、道場時代をしつかりなぞってみる頃から始めようと思いついたことは、自分にはよいきっかけです。

惜しむらくは、二月、釈迦涅槃会図をかけておくことをすっかり失念したこと、申し訳ないことでした。